
ゴッドゲーム

月光ほたる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴッドゲーム

【Nコード】

N0590E

【作者名】

月光ほたる

【あらすじ】

神の造りしゲームそれは神を探し殺せば一つだけ願いが叶うというもの。しかし、この世界で死ねば今までの存在を消され全ての者の記憶から消えてしまう。人々はたった一つの願いと自分の存在をかけて戦い、殺し合う。そんな世の中で唯一神に逆らう反逆者達とこの不吉な世界に迷い込んだ少年、そして全知全能の神のゲームが始まった。

さあ、私を殺してごらんゲームの始まりだよ

プロローグ（前書き）

この作品の中の『神』は宗教的な事をはぶいています。
別物とを考えてください。

作品には少々グロテスクな表現があります。お嫌いな方は注意してお読み下さい。

ブローグ

ネオンの光る町並み。

その小さな一角の路地裏。

あちこちから伸びているパイプからは噴き出す蒸気が白く暗闇の中から怪しげに揺らめく。

ゴミはあちらこちらに散らばり、少し生臭い臭いが立ち込める。空気の淀みがそれ臭いをさらに増幅させているようだ。

汚れたこの町、いや世界はもう綺麗な空気などないのかもしれない。

ドガンツッ！

けたたましい爆発音と共に路地裏の一部が大きくえぐりとられる。赤く光る煙り、そこからどす黒い煙りが舞い上がる。

「ルスカス！！」

爆発の煙りから逃れるように現れた青年が叫んだ。

明るい茶色の髪に金色の瞳、スラリとした身体つきの青年だ。

煙りの中ではさらに炎が上がる。

火柱がいくつも上がり、煙りが最初の爆発よりも増す。

「ルスカス！！」

もう一度青年は煙りに向かって叫んだ。

そう叫んだ直後煙りから白髪の青年が飛び出してきた。

白髪の青年はバサリと地面に倒れ込む。「ルスカス！無茶苦茶や！

！ここは一旦引いてからやないと……」

「駄目だ！！！！」

ルスカスと呼ばれた青年は言葉を遮るように叫んだ。

「今を逃したら『神』に辿り着けない！」

「阿保！この状態でいける訳ない。無駄死にや！！」

そ言った途端、煙りの中から何人か仲間が現れる。

風に流され路地裏の煙りが消え去ったからだ。

暗闇に潜む殺気立つ相手に全員意識を向けた。

ルスカスも直ぐに神経を集中させようとしたが、目の前に一人男が倒れているのが見えた。

ルスカスは傷だらけの体を起こし、倒れている仲間に駆け寄る。

「しっかりしろ！俺の声が聞こえるか？」

張り上げたルスカスの声に血まみれの男はニヤリと笑いかけた。

その笑顔でルスカスは歯を思いきりかみ締めた。

笑った男の体が段々砂になり消えていく。

「クソ！！駄目だ、消えるな！！」

ルスカスの叫びは虚しく響き、その叫びとともに男だった砂は風に舞った。

「……！」

ルスカスがうなるような声を上げ、名前を呼ぼうとした瞬間声を出すことを拒んだ。

そのままルスカスはその場にペタンと座り込む。

仲間の名前が出てこない。

目の前の砂がもう誰だったか記憶が無くなったからだ。

顔も、性格も、性別も。

確かにここで仲間は死んだ。

だかもうここで死んだ人の存在は消えたのだ。

「撤退だ！」ルスカスは小さく言った。

その声に反応して仲間は一瞬うろたえたが闇に向かって走り出す。

仲間が消えてからルスカスは先程まで爆発があった方に向き闇をにらみつけた。

「何故神に従うように俺達が戦うんだ！俺達は団結して神に逆らうべきだろ！！」

強く闇に叫ぶルスカス。

しかし、その言葉は戦っていた相手には届いていなかった。

「ルスカス！逃げよう」最後に残った茶髪の仲間に呼ばれ、ルスカスは仲間だったはずの砂を握りしめ立ち上がる。

「神、お前は何がしたいんだ。死んだものの存在を消して何が楽しい。記憶を消して何が嬉しい。こんな世界を創造してお前は何を求めてるんだ」ルスカスは虚しく呟いた。

淀んだ空気がまた路地裏に舞だす。

ルスカスは一度だけ天を仰ぎ、走り出した。

私を殺してくれないか。そうすれば一つだけ願いを叶えよう。
私を捜し、消せばいいだけだよ。さあ、ゲームの始まりだよ。神のゲームの…

ゴッドゲーム

1話 夢なら覚めて

ほのかな日の光りに爽やかな昼下がりに通る風を浴びる。

放課後の校庭。

校舎の方では吹奏楽の楽器の演奏が微かに聞こえ、校庭では運動部の掛け声が聞こえる。

手入れされた花壇に花が咲き誇り、蝶が舞っている。

そこで大好きな読書をするなんて。

ああ…なんて幸せなんだ。

学校の校庭隅にポツンとあるベンチに座りながらほのぼの幸せを噛み締める一人の少年がいた。

2年前に高校に入学してから放課後の時間はほとんどこの場所を陣取り読書をする。

少年は一瞬ベンチの隣にそびえ立つ大きな桜の木を眺め、また読書を始めた。

焦げ茶色の髪にやや緑がかった瞳、日本人離れた鼻からしてハーフに間違いないようだ。

5月の太陽と新緑の桜の葉に酔いしれながら少年はページをめくる。

「今日は何読んでるの？文目くん^{アヤメ}」

突然前から声をかけられ文目と呼ばれた少年は顔を上げた。「赤木さん、休憩？」

びつくりする事なく文目は声をかけてきた女の子に聞いた。

「うん。10分だけね。」

黒髪をショートヘヤーに半袖半ズボンのジャージを着た女の子は文目の座るベンチの隣に座る。

「私の呼び方がいい加減変えてよ。付き合い出してもう何ヶ月よ」

「あ、忘れてた。つい癖だね。」

そう言われ女の子はプクリと頬を膨らます。

「怒らないでよ杏^{あん}」

文目は怒り顔の杏にアタフタしながらそう言う。は仕方ないなあという意味を込めたため息をついてニツコリと笑いかけた。

その顔にホツとした文は本をパタリと閉じる。

「今回の物語はどうだった？」

杏が首にかけていたタオルで頬に流れる汗を拭きながら聞く。毎回こんな会話から始まる二人。もう付き合い出して2ヶ月が過ぎようとしていた。

いつも文目が座るベンチに杏がたまたま陸上部の休憩に来てからが始まりだ。

「今回は少しせつない話だったかな」表紙全体に青空の写真がプリントしてある本を見つめ文目は言った。

「ふう〜ん。内容はどんなの？主人公はどんな性格？」

いつもの質問に文目はえ〜っとと話す順番を考えだす。

「杏、たまには読んだら？」

話そうとした文目はふと杏に聞く。

「ええ〜。私文目くんが話してくれるのが好きなの！」

「読んだほうがもっと楽しいよ」

「本は開いただけで眠くなっちゃう。教科書で十分だよ」

杏の言葉に文目はやれやれと首を振った。

「でも今回は短いし、文章もあっさりしてて読みやすいから大丈夫だよ」

文目の言葉に杏はブンブンと首を振る。

「大丈夫だって」

文目がにこやかな笑顔でもう一度本を進める。

杏はんん……と悩んで結局本を受け取った。

「わかった。本の虫の文目がいうなら頑張って読んでみる」

「虫は余計ね。好きなだけだよ」

文目は軽くハハッと笑った。

「筑波文目。読書家の名前はこの学校じゃあ有名よ。図書館やこの町の本を読み尽くす男ってね」

「いやいや、俺は物語しか読まないから。ファンタジーばかり読んでるし」

杏の言葉に苦笑いを浮かべながら文目は話す。

「それよりは杏の方がすごいでしょ。陸上、短距離の星。赤木杏の名前ほどこの学校で有名なものはないよ」

文目の言葉に杏はそうねとあっさり答えた。

「私は走るのが好きなだけ。周りが盛り上げてるだけよ。まあ悪い気はしないけどさ」

それだけ言つと杏はベンチから立ち上がり一回大きく伸びをする。

「そろそろ練習もどらなきゃ」

「うん。俺もその本読み終わったし、新しいのを本屋に探しに行こうかな」

文目も立ち上がる。

「じゃあ、また明日ね」

「うん、また朝家に向かえに行くよ」

軽い挨拶をして杏はグラウンドに走って行く。

そこで一回振り返り、文目に手を振ってまた走りだす。

文目はにこやかに笑いながら手を振り返し、鞆を持つと校門に歩き出した。

さて、次はどんな本を読もう。

文目は早速頭の中で新しい本の目標を決めていた。

本が好き、というかその中の異世界や不思議な力、魔法、動物が好きなのだ。

この世界にはない何かが好きだ。
毎日同じ繰り返しの中の自分にはない世界を求めているから本を読んでいる。

それが1番近い思いかもしれない。

今は幸せだ。

自分を好いてくれる彼女もいるし、海外にいて会えない両親もいつも気にしてくれているし。

学校も嫌いじゃない。

しかし、何か物足りない。そんな気持ちになる。その穴埋めをしようと文目は本を読んでいた。

「はあ……」

ため息を着きながら文目は校門をくぐる。

桜並木を超えて駅までの道のりを歩く。

歩き始めて5分、車や人通りの多い道を歩きながらふと店と店の間に道があるのを見つけた。

何となくその路地が気になる。

ゴミ箱と段ボールしかない狭い路地。

何か新しい事はないかな。そう思いその路地に曲がる。

もしかしたら本屋への近道になったりして

小さな冒険な気がして顔がニヤついた。

狭い路地を歩き、突き当たりを右に曲がる。

それを進んでさらに左に。

同じような空間が少し続いたと思ったら次の突き当たりには何やら大きな空間があるようだ。

文目はその空間目指して進む。

何があるかドキドキが増す。

少し駆け足になり、狭い路地から脱出する。

路地が開け、圧迫感から開放される。

「ええ！何だよ」

思わず文目は声に出してショックを受けた。

脱出した空間を一通り見渡すとため息が文目の口から漏れた。

何て事ない。路地と変わらない空間。ただ広いか狭いかの違いだけであつた。

「って高校にもなつて夢見すぎだな」

やれやれと自分自信を馬鹿だなあと思いながら元の路地に戻ろうと歩き出す。

「ん？」

急に何か生臭いような焦げ臭いような臭いが鼻につく。

一瞬で空気がどよめく。背中がゾクツとする。

文目はゆっくりと後ろを振り向いた。

バチィッ!!

けたたましい破裂音、それから起こる光り。

たちまち雷が路地を襲う。

「なツッ!」

声を上げようとした時、目の前にドサリと何かが落ちる。文目ははそのなにかから数歩後ずさりした。

その何かはゆっくりと立ち上がり文目の前に立ちはだかる。

人? 黒い物体は黒づくめの男?

気持ち悪いぐらい痩せほそった体型。ギロリとした目。文目は背筋が凍る感覚を感じた。

その男は手の平を文目に見せる。

バチバチの電気が走り、金色の色を発するその手に文目はただ見つめ、動く事が出来ない。

ヤバイ!! 逃げろ!

頭が痛いくらいに危険信号を発している。

なのに身体が動かない。

ダメだ……。

そう思った瞬間。

目の前の男の背中に赤々と炎が上がる。

「……………!!」

男は声も出さずに後ろを振り返る。

しかし、振り返った直後その男は炎の塊となり、燃え盛っていた。

「あ……………」

何かを発しようとした文目の声はただのうめき声になる。

その声とともに目の前の炎の塊はバサリと砂の山になり、さらに燃える。

人が、たったさっきいた男が炎に包まれ、砂に変わる。

「何だよこれ」

やっと出た文目の言葉につられ炎はさらに大きくなる。

すると、炎の向こう側に人影が写る。

炎がやがて消え始めるとやがてその人影がはっきりと見えてくる。

白髪に真つ赤な瞳。自分と同じぐらいの年齢、いやそれ以上か。

その青年は文目をじつと睨む。

「まだいたか。神の使い」

「え？」

「俺達は消えない。神には従わない」

そう言った白髪の青年の身体に赤い炎が舞だす。

まるで蛇のように。

ああ……。

これは夢なのか？自分の妄想か？自分が世界に存在しない何かを探したからダメだったのか？

文目はその炎を見つめながら夢なら今覚めてくれと願った。

2話 お前の名は

身体が固まる。息ができない。

目の前に迫る赤い炎。

文目は白髪の青年に向かってただ呆然と立っていた。

人間こんな状況になると動かないものなのか……。と頭の裏で感じる。

青年の放つ炎が一気に文目に迫る。

ダメだ！！

文目は思わず持っていた鞆を前に突き出し、炎から隠れようとした。そんなのでどうにかなる訳ない。分かっている。しかし、そうすることしか出来なかった。

さあ、ゲームをしよう。君を待っていたよ。愛しい君を

「え？」

鐘の音のような、男のような、女のような。不思議な声が頭を過ぎる。

その途端。

バサアアア……。

目の前に迫った炎が砂、いやそれよりさらに細かい粒子に変わり、散っていく。

「炎を消した？風使いか？」

白髪の青年はその言葉を言うと文目に向かって走り出し、腰に付けていたサバイバルナイフを取り出す。

文目は前に突き出していた鞆でそのナイフを受け止め、後ずさりした。白髪の青年は鞆を真つ二つに切り裂き、文目の首を狙う。

「うわあああ！！」

文目の制服のえりを裂いた時、文目は思わず声を張り上げた。声を上げた瞬間、文目はドサリと尻餅を着く。

「何！？」

尻餅を着いた文目は声を出した青年を見る。

すると青年が握っていたナイフがさっきの炎と同じように粒子に変わり風に舞っていた。

「お前、何者だ!？」

青年は見下ろすように文目を見る。「君こそ誰だよ!急に襲って来て、俺を狙うのは何でだよ!炎は出すし、目の前の男は砂になるし。神の使いつて何だよ!！」

文目は恐怖のあまり興奮して青年に怒鳴った。
指先がガタガタと震える。

何だよ!俺が何かしたのか?

文目の頭の中はグルグルとそればかりが回る。

「お前、この世界の人間じゃないのか？」

青年は驚いた顔で聞く。

「世界?何言ってるんだ!俺はただ路地裏に曲がっただけだ。本の世界じゃあるまいし、異世界なんて存在しないだろ」

文目はまだ興奮が冷めないまま青年に叫ぶ。

その言葉を聞くと青年は急に文目に近づき、ひざをつくと文目のえりを引っ張った。

「やめろ!何で殺すんだよ!！」

「違う」

文目がその手を振りはらおうとしたが、青年の力の方が上だった。

「コードがない」

「コード?」

文目が聞き返すと青年は文目のえりを離し、自分の首筋を見せた。
そこには黒いバーコードのようなイレズミが見える。

「何だよそれ……」

文目がそれを見つめながら言った。

「神のゲームに参加している者の証だ」

「神のゲーム?」

文目がその言葉をくり返すと青年は何かを感じたのかニヤリと笑う。

その時、青年の後ろにビルの上からスタンと軽い音をたてながら人影が着地してきた。

一人は茶髪の細身の青年。もう一人は金髪のツインテールで文目と同じ。ぐらいの女の子だった。

「さつきは悪かった。俺はルスカス。お前名は？」目の前の青年が名乗る。

「あ、文目。筑波文目」

「文目か」

ルスカスはうれしそうな声で名前を繰り返す。

「ルスカス、こいつは？」

後ろの茶髪の青年が不思議さうにルスカスに問い掛けた。

「猿梨、アイリス、喜べ。俺達は切り札を手に入れた」

「??」

問い掛けの答えに反する言葉に後ろの二人はお互いの顔を見合わせ首を傾げた。

「神に勝つ切り札だよ」ルスカスは文目を見てまたニヤリと笑った。

3話 ようこそ。闇世界へ

「どうぞ」

ちよつとふてくされた顔をしてアイリスが文目の前に紅茶の入ったカップを差し出す。

「ありがとう」

文目はそれだけ言うつと湯気の上がる紅茶に口を付けた。とにかく落ち着こう。

そう心中で何度も呪文のように唱えてる。

大丈夫、落ち着こう。

文目は両手で持つカップの中に写る茶色の自分を見つめた。あれから文目はどこかに行くあてもないため、ルスカスにつられてこのマンシヨンの一室についてきていた。

外は自分がさつきまで見ていた街の風景はなく、代わりにあったのは『汚い』という言葉が相応しい世界が広がっていた。

空が見えないぐらいびっしりとたたずむマンシヨンやら工場ビル。

あちらこちらのパイプから立ち込める蒸気。

鼻につく生臭い臭い。

まさに本の世界のスラム街。

文目は一旦大きく深呼吸をした。

「少しは落ち着いたか？」

隣の部屋から出て来たルスカスが文目に声をかける。

「何とか……」

文目は2口目の紅茶を飲み言った。

「質問したいことが山ほどあるだろう。答えよう」

ルスカスは文目の向かいのソファーに座り足を組ながら言った。後ろからついてきた猿梨、アイリスがその左右に座る。

「えっと……まずはここは何処ですか？」

文目の質問にアイリス、猿梨は目を見開いて驚く。

「お前、本当にこの世界の事わからへんのか？」

驚き声の猿梨に文目は頷く。

「はあ。ほんまかいな」

「だろうな」

ため息をつく猿梨の隣でルスカスが話し始めた。

「ここは神が造った新しい世界だ」

「新しい？」

文目は窓の外のスラム街を見て言った。

「ああ、神がゲームをするために造った世界だよ」

「ゲームですか？」

「そう、俺達を巻き込んだ神のゲームだ」

ルスカスは足を組直し話しを続ける。

「神を捜し、殺すだけの単純なゲームだ」

「神を殺す！？」

文目は3口目の紅茶を飲もうとしてむせ返る。

「3年前。神はゲームスタート時、俺達にこう伝えた『私を捜し、殺せ。そうすれば何でも一つ願いを叶えよう。しかしこの世界で自らが死ねば今まで生きた存在は消える。願いを叶えるか、存在ごと世界から消えるか、ゲームをしよう』と……」

「今でも覚えとるわ。あの声……」

猿梨がボソリと言葉を吐く。

「その言葉からこのゲームは始まった」

ルスカスは文目を睨むように言った。

「存在を消すって？」

「その言葉通りよ」

アイリスが文目の言葉に答える。

「ついさっきまで生きていたはずの人の存在を忘れるの」

「??」

「じゃあさっきお前の目前で砂に変わった奴はどんな奴だった？」
文目の困り顔にルスカスが聞く。

「えつと……」

「覚えてないやろ？どんな奴か。男か女か。服装は？背丈は？」

「……」

文目は猿梨のさらなる質問に戸惑う。

さつき見たはずの人がわからない。さすがに服装や背丈はわかるだろうと頭をふる回転させても、文目にはわからないという答えしか見つからなかった。

「それが存在を消すって事や。昨日共に笑った仲間も、さつき戦った敵も死ねばもう俺達生きてる者には存在しない事になってまう。確かにその場にいたはずの誰かがわからなくなんねん」

猿梨にそう言われて文目はぞくぞくと鳥肌が立ったのがわかった。

「そんな世界……」

あるはずない。文目はその台詞は最後まで声に出して言えなかった。現にこうしてその世界にいる。

その事実が怖くなり、握ったカップに入っている紅茶がユラユラと揺れた。

「3年前って事はそれまではみなさん俺と同じ世界にいたんですか？」

文目は質問を続ける。

「ああ。皆別々の国籍だ」

「違う国？でも言葉が」

「皆一緒になるの。貴方が聞こえている言葉はもう前の世界と違う。でも理解している」

アイリスが言う。

「国籍をなくすために神が仕組んだんだろう。髪、瞳、声は全て変えられた。性別や年齢は一緒だな」

「ちなみに、俺はチリ。ルスカスはエジプト。アイリスは中国や」

猿梨が付け加える。

「でも俺は何も変わってない」

制服は着てる。髪も目もガラスに写るのは確かに今まで見慣れた自

分がいる。

「変わってないだろうな」

文目の言葉にルスカスが答える。

「お前は这个世界にさつき来た。参加である証のコードもない。身体の変化もない。つまりお前は神のゲームの部外者だ」

「部外者？」

「そう。お前は这个世界の招かざる客。存在しない人物」

ルスカスが少し微笑んだ。

「つまり、神はコードを持っていないこいつの存在を知らない」

猿梨が何か気付いたように言う。

「文目はゲームの参加者じゃない。なら何か事を起こしても神は気付かない」

アイリスが続く。

「え？何？どういう意味ですか？」

文目は何か嫌な感じで焦りながら質問する。

「お前がこのゲームのキーカードになるんだ」

ルスカスの言葉に文目は思わず立ち上がった。

「ちょっと待ってください！俺はこのゲームの部外者でしょ？何でゲームに参加しないといけないんですか！？」

「じゃあどうするんだ？」

「決まってる！こんな危険な世界にいる気はないです。元の世界に帰ります」

ルスカスに少し声を上げて文目が反論する。

何か不思議な事を探していたが、危険な世界、危険なゲームを聞いただけでも鳥肌がたったままなのに、さらにそのゲームに自分は巻き込まれそうになっている。

そんな事あってたまるか！

こんなところからいつくも早く元の世界に帰らないと。

「帰るってどこから？どうやって？」

ルスカスはカアツと血がのぼった文目にさらりと問う。

「……それは」

文目はルスカスの言葉に反論しようとして声をだす。

しかしきちんとした答えは出てこなかった。

さっきまでいた世界に帰る。

来たばかりでどんな状況かを理解したばかりで、自分はたしてすんなり帰れるだろうか。いや、まず帰れるはずはない。

文目は一瞬固まり、ルスカスをチラリと見るとまた元のソファーに腰を降ろした。

「俺達がこの3年間、元の世界に帰る手段を探さへんかったと思っ
たんか？」猿梨の言葉に文目は口ごもる。

「この世界からは逃げられないわよ。神を殺す以外はね」

アイリスはため息混じりで続ける。

「まあ、今この世界に来たんだ。ゆっくり悩むといい。時間なとい
くらかもあるのだからな」ルスカスはソファーから立ち上がると文
目に言った。

「ようこそ。闇の世界へ」

文目は最後の言葉にゴクリと息を飲んだ。

4話 一人にさせて

ボタンと扉を閉め部屋から出たルスカスの後ろをアイリスが追いかける。

「本当にあいつを信じるの？」

アイリスの言葉にルスカスは振り返る。

「文目は俺達の鍵になる」

髪をかきあげながらルスカスは淡々と言った。

「……でも私は」

「納得出来ないか？」

ルスカスの言葉にアイリスはコクンとうなずいた。

ルスカスは一度ため息をつきアイリスの頭をポンポンと軽く叩き微笑む。

「大丈夫。俺を信じる。一緒に元の世界に帰るんだろ」

アイリスはルスカスの顔を見るとカァツと顔を赤らめ頷いた。

「俺達はこのゲームを終わらせる」

ルスカスはアイリスを見るとまた前を向き歩きだした。

窓から濁った空気が入り込む。

その風にルスカスの透き通った白銀が揺れた。

「そして、俺達は神に逆襲する」

ルスカスはもう一度髪をかきあげながら小さくそう付け足す。

アイリスには見えていなかった。その時のルスカスの顔は、笑顔の消えた憎しみに溢れていた。それはまるで炎を纏った鬼神のような……悪魔のような。

「ゆっくり悩めやそうや」

ルスカスのアイリスがいなくなった部屋で猿梨が文目に伝える。

「はい……」

文目はか細い声で返事をするに残っている冷めた紅茶を飲み干した。
「まあ他にも質問リクエストがあるなら随時受け付け中やで。危険区域以外なら俺が連れてつたるし」

猿梨はソファーに深く腰を沈めてグデンと楽な姿勢になる。

「じゃあ、少しの間一人にさせて下さい」

文目は震える声で猿梨に言った。「悪いんやけどそのリクエストは却下」

「何ですか」

「俺はお守り役やから」

「見張り役の間違いでは？」

文目の厳しい突っ込みに猿梨はハハッとだけ笑い立ち上がる。

「外に出えへん？周りを見れば少しは気分変わるかもしれんで？」

猿梨の提案に首を振った。

「そう言わんとさ、な？」

猿梨にやや強引に腕を引っ張られ、文目は立ち上がる。

「ちよっ、やめてくださいっ」

「いいやん、この世界のルールやらを教えたるからさ」

「いいです」

「せっかくの人の行為を無駄にしたらあかん。俺が……」

「いいです!!」

文目は猿梨の言葉をさえぎり少し強めに言って、猿梨の腕を払いのけた。

「今、俺をほつといてください。一人で考えさせて……」

文目は顔を下に向けけて言った。

そんな文目を見て猿梨はハアとため息をつく。

「あのなあ、確かにそうなるのはわかるわ。突然こんな世界に来て、神とゲームやら存在が消えるやら馬鹿げた話しやと思う。俺も最初そうやった。でも、もうお前はここに来た。この世界の住人になったんや。はよう腹くくらな……死ぬで」

猿梨の言葉に文目はビクツと反応して猿梨を見た。

「俺はそんな奴ら何人も見た。どんな奴らだったか忘れてしもたけどな」

猿梨は文目を目を見た。

「もう1回言うたる。はようこの世界のルール知って生き抜く力身につけな、自分死ぬで」

文目は猿梨の真剣な顔に恐怖を感じ数歩下がった。

「って事でえゝ外案内したる！大丈夫やゝ俺がボディーガードしてるんやから問題ない！」

突然猿梨は二カアツと笑い文目の腕を握り扉を開けた。

「ちよつ」

文目は拍子抜けしてそのまま猿梨に引つ張られる。

「さあさあゝ異世界ツアーのはじまりいゝ」

さっきの張り詰めた声違う猿梨の陽気な声に、ピリピリとしていた文目の気持ちが少し和らぐ。

「じゃあ……お願いします」文目がそう言うとき猿梨は後ろを振り向く。

「まかしときい！後、文目、この世界では敬語は必要ないで」
「必要ない？」

「そう！この世界はみんな3年前からいるんや。いくら年上やからって気い使う事なんかない。逆に使うと珍しくて怪しまれんで」

「わかりました……じゃない、わかった。ありがとう」

猿梨の話しに文目はそう返事をした。

「よしよし」

と猿梨は軽く言うとき文目の腕を引つ張りながら部屋を出る。

文目は引つ張られるまま猿梨についていく。

文目は心に少しだけ『この世界を知りたい』という思いが目覚めて来ているのに気付かないまま外へと歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0590e/>

ゴッドゲーム

2010年10月11日22時01分発行